

TO BE

——今日はいい天気だ。雨でも降りそうな強い風の春の日。ちょっとずつ暑くなっている外界の天気を、変わっていく空模様を、全身の皮膚で感じられる。外でたむろっているときも多い生活だが、散歩しているときほどこういう気象の風をまっすぐ受け止められる時はないであろう。木が揺れてる。木陰、木の葉のあいだから漏れる、陽光。

美しい。世界はこんなにも美しい。

こんな自分にもきもちのいい風が散歩中に与えられる。

俺に脚があってよかった。散歩だけが俺にいろいろな発見をくれる。

またずれだつて、くつずれだつて、こわくないさ。

どんなときも散歩があるから、笑っていられる。

何か見つかるといいなあ。

ある人がある場所で散歩中、遺体を発見した。

発見者は四十三歳男性、田中勝行。

遺体は肝臓に指が五本刺さっていた。

最初はホルモン焼き屋さんが捨てたごみかなと思っていたが、そんなことはなさそうだと気付いた。だつてここは噂の現場だから。

恨みと怨念に縛られている人が最後にいきつく鸚鵡の国。

いじめられっこやリストラされたひとたち、ほか、あらゆる迫害を受けた人たちの鸚鵡の国なのだ。

この場所は昔宗教施設が建っており神の居場所でありたくさんの人を殺すための薬物や自殺するためのマシンが開発されていたその宗教では死は救いであり自殺も別に悪いこととされてはいなかった。むしろ勇氣ある行動として選択肢のひとつにあった。

人々は自殺するためにここに訪れても、同じような人やもっと大変な人がたくさんいるところにきて分かってくると楽しくなってきたり生きたくなってきたり友達ができたり恋をしたりなどして救われちゃったりなどして居心地がよくなっちゃったりなどする。要するに名言をぶっぱなつ僧侶がいないだけでここはちいさな駆け込み寺みたいなものだっ

た。

その町にもともと住んでいた人たちはこの宗教施設を嫌がった。なんか九〇年代の日本で大きな事件をおこした宗教を思い出したからだろう。この国の人は宗教はあまり好きではなかった。宗教の教えはいいことが言われているし宗教を通していろんな人と出会ったり救いを受けられたりなどするが、そんなものはだいたいにおいてまやかして、懺悔の場であなただけを許してくれるのは神ではなく人々でしょと思っていた。

あと他者の考えが自分におおきな影響をあたえ、無防備な脳に流入してくるのがなんか気持ち悪くて、いわゆるロックスターにあこがれたりアイドルを追っかけたりするのもそれにた信仰の気持ちなんだけれど、それはわかっちゃいるんだけれど、人生のあらゆる場において生じる選択に影響してくる哲学や生き方の作法みたいなのは個々で見つけて個々で考えて作り上げたがった。それがたとえ誰かの考えにそっくりだったとしても、その人の人生で使うその人の考えて思いついたその人の哲学なんだからなんら問題はない。

さて、話を遺体に戻そう。

田中勝行は遺体を見つけた。でもそれは肝臓に指が五本刺さっているというだけで、遺体といえるほど人間っぽくはなかった。

田中勝行がどうしてこんな「噂の現場」にいたかという、それは田中勝行が宗教の信徒であるからではなく、彼もちょっと生活につらいことがあって、ていうか家をなくしちゃったし、仕事もしてないし、妻になってくれる人もいないし、バレンタインにチョコをくれたりつらいときなぐさめてくれたりうんこ漏らした時処理を手伝ってくれるような人もいなかったから、散歩がてら、友達作りのために、興味本位で、（複数回答可）死と死を望む宗教とその周辺のひとびとに近づいてみようと思ったのだった。普段何にもすることがない人のいざというときに発揮するエネルギーはものすごいものである。衝動的に「噂の現場である鸚鵡の国周辺とやらを散歩して見よう。なにか発見や出会いがあるかもしれない」とおもったのだった。なので腰はそんなに重くなく、余裕のある楽しい気分であわわわを見つげにきた。

目的があつては散歩ではない？ いやいや、目的は歩きながらできていくもの。そして散歩は出かけようと思った時点から始まっている。そうでしょ？

そんな動機であるからして田中勝行はその発見にたいそう喜んだ。まあ今の彼のメンタリティだったら、鸚鵡の国でウンコを踏んだだけでも大喜びしていただろう。「鸚鵡の国

のウンがついた。ラッキー」とかなんとか言って。とにかくそれほど刺戟というか他者とかかわりに飢えていたといえる。

さてこのレバーをどうしようか。田中勝行はそっとそれを拾った。事件のにおいがするぜ。ぷんぷんするぜ。形を崩さないようにそっと拾い上げ手に乗せる。人間の肝臓は強いし寡黙だしぷるぷるだしつらいことがあってもすぐ再生できる。肝臓となら友達になれそうな気がした。交番に持っていきこうかとおもったが、知り合いだった刑事さんが「グロとか無理」というのを理由にきのこの山やたけのこの里にちゃんとチョコが規定量かかっているかをチェックする仕事に転職したことを思い出して（しかしその元刑事は結局きのこのたけのこ戦争で戦死した。名誉の死だったと田中勝行は思う）交番に迷惑をかけたくない気持ちを優先させた。

でも事件のにおいを自分だけのものにしておくのもどうか。なにかあったときに自分がいちばん疑われるんじゃないか。俺の挙動が原因でこの町の人と宗教施設とで戦争が起こるんでないか。それはやだなー。やだやだ。めんどくさいし。でも俺は家もないし身うちもない。それこそ突然身をひそめても誰も探しに来ないし心配したりしない。ていうかだれも俺のこと知らないし、覚えてないし、フェイスブックやってないし、もしかしたらこのまま肝臓とともに暮らしていても誰にも何にも言われないかもしれない。保存状態だけ気をつければ、たぶん大丈夫。強くて寡黙で文句ひとついわず体内の解毒を行っていた肝臓だ。そしてこの指も、持ち主が無茶するから結構苦勞しただろう。くさいもの持たされたりもしただろう。人間の勝手に、超高速で動くことを強いられたり、いたいことされたりとかしただろう。もう大丈夫だ。俺が全部守ってやる。

ということで、田中勝行はこの肝臓に五本指がささった物体を自分のものとし持ち帰ることにした。こういうものとなら、友達になれそうな気がした。

自分のよくぶらついているメインの場所で、駅で拾った週刊誌や小説、自分が読み終わった書籍などを並べブルーシートの上に敷く。即席古本屋をしながら、なんとなんとなんといけどなんとか生計をたてていた。だれもが気にも留めず通り過ぎて行った。ときどき、めちゃくちゃ閑そうなサラリーマンが田中勝行の並べている本の前で立ち止まり、立ち読みし、そのまま帰ったりそっけなくお金をおいてその本を持ち去ったり（世間ではこれを購入という）した。

毎日それをやっているわけじゃないし場所もときどき変えていたので、誰かに憶えられたり摘発されたりすることは今までなかった。本の売り上げでなんとか保冷バッグを買っ

て、明け方の氷や野良犬の涙を
拾って、肝臓に五本指が刺さった友達を保冷し大切にした。

時々話しかけたりなどしました。

田中勝行はおしゃべりなタイプではなかったが、肝臓を前にして話はどんどん弾んだ。自分はこんなにしゃべれる人間だったなんて、田中勝行自身も知らなかったと思うほどであった。小学校を卒業して以来学校には一度も行っていないが、小学校でクラスメートと話すことができなかった。話題が思いつかなかった。男子は大体ゲームでコミュニケーションをとるが、田中勝行はスポーツはだめだったし（山登りは好きだったが山の魅力を語れるほど語彙がなかった）ゲームもひとつも持っていなかった。話題の種もなかった。だからこんなに話したいことが思いつくなんてことは今まで、誰と居たってなかったことだったのだ。田中勝行は肝臓に五本指が刺さったやつと話しているとき、心がほかほかとあったまのを感じた。初めてに近い感覚だった。

ある時の即席古本屋営業時間中、なにげなく週刊誌を読んでいるとあの噂の現場について書いてあった。そういえば、あの現場はあれから行っていないけれど（たとえばこの肝臓の関係者が偶然田中勝行が肝臓を持っていることを知っていたとして、大事な肝臓をかえせとか言われたらやだから）あの現場についてはじめて知ったきっかけもこういう拾いものの週刊誌だった
なあと思い返した。

なんでも、美少年のバラバラ死体が発見されたそうである。美少年は美しすぎるがゆえにいじめられ、自殺を考えあの宗教施設に向かったそうだ。美少年はバレエがとてとても上手だった。来年にはローザンヌのコンクールに出ることが決まっていた。そしてとてもお金持だった。首を吊るためにか、それとも最後までバレエを愛していたことの表明なのか、リボンのひときわ長いポアントを持っていつていた。

けれど美少年は多くの人の心をひきつけるだけに、いろんな人のいろんな念を受け取りやすい。宗教施設付近に暮らしていた何者か変態の所業によっておかされ殺されバラバラ

にされたとのことだった。内臓までしっかりと分断されており、少しずつ遺体の一部それらはみつかつてきてはいるが、右手の指と肝臓だけが、未だ見つかっていないという。

田中勝行は、友達である肝臓の持ち主が美少年だったことにたいそう喜んだ。「ヴェニスに死す」のタージオを想像しながら、幸せな気持ちで肝臓を見た。

もう肝臓は連れ添いすぎてどんどん劣化が進行していた。古本屋をやるときも、飯を探しにいくときも、保冷バッグのなかに入れていつも肌身離さず連れ添っていた。でも保冷効果抜群の野良犬の涙でももう保冷しきれないほどに時間が経っていたのだ。小学校の理科では友達はどうなかたちをしていてもどんなに強くてもいつかは腐っていくということなんて習ったかしら、と田中勝行はしょんぼりしていた。それでもなんとなく知っていたのだ。よく見かけるホームレス連中は横になったまま死んで腐って森に還っていった。鳩の死骸や、たぬきやきつねの死骸などあきるほど見たことがあった。どんなに再生能力の強い肝臓だって、どんなに重いものを持って痛いことでもがまんできた指だって、いつかは腐るということ。能力がどんなにあってもそれがなにかの一部であり、統括本体から切り離されてしまっただけで能力を使えずただ栄養不足で腐ってしまうということ。

田中勝行も家や仕事をなくし友人や恋人がいないということで、社会との血流がとだえたような気持ちになって、死を選ぶという選択肢も考慮して、あの宗教施設に興味を持った。けれど古本屋をやったり飯を食っている限り彼自身、社会との血流関係を喉から手が出るほど無意識に求めていたのだ。無意識と言いきれるかもわからない。それは意識下に完全に上がっていると言えるほどに強い希求ではなかったか。そうでなければなにかを求めて散歩をしたり、肝臓に五本指が刺さったものと友達になったりなんてしないはずである。

田中勝行は肝臓の持ち主であった美少年のことを考えた。美少年がいきいきとバレエを踊っているところを、田中勝行が父のような笑顔で見つめる。たぶん年齢的に息子だと言ってもぜんぜんイケるレベルだ。美少年のしなやかな脚。たぶん長くて細くて、でも筋肉はしっかりある程度ついている。あんまり筋肉をつけたら大きくなれませんよと高身長好きの母に言われ、先生には筋肉をしなやかにつけるんですよと言われ、野球少年みたいなずんぐりした下腿にちょっとあこがれたりもする、美少年。唇はもちろんバラ色。おばあちゃん子。たぶんこの指は大切に大切に扱われ、いたいことなんてさせられなかつただろうな。でもお手伝いはそこそこしていて、毎日のお小遣い目的での洗いものによって少し油分がたりなくなっている指。たぶんお茶の時間に出される母の手づくりケーキのクリー

ムがほっぺについてしまって、それを拭ってなめたりなどもしただろう。美しいことしか知らない、美しい指。肝臓も、美少年だからあんなにぷるぷるだったのだ。いい家庭でいいものを食べているから大切にされて、酒とかジャンクフードなんて全く入らない。でもどんなに美しくても少年だから、こってりしたものは好きだっただろう。ときどき許されるお菓子やハンバーガーや、そういうものの解毒をむしろ娯楽としてこの肝臓もよろこんでいたかもしれない。

田中勝行は美少年のことを思うと涙が出てきた。

少年とかかわる仕事がしたいと思いついた。だがそれは衝動的な決心であり遂げられるかはまだわからない。

とりあえず、この腐ってきた肝臓を大事に大事に、いちばん景色の綺麗な場所に埋めることにした。

散歩中に見つけた、いちばん木漏れ日の美しい場所へ。

/ 終 / ひのはらみめい